

第3章 大英帝国の形成と限界



ロンドン テムズ川の風景

全ての道がローマに通じたように、全ての海がロンドンに通じた。

明治維新さらに近代日本の成立に対して、大英帝国は極めて大きな影響を及ぼした。まずは薩英戦争や下関戦争を通じて、日本はイギリスに習うべきことを自覚し、攘夷から討幕・開国へと大旋回した。次に、新国家建設に当たり欧米先進国の諸制度を調査するため、岩倉使節団を派遣した。日露戦争において、高橋是清による日本の外債発行を通じた資金調達を容易にしたのがロンドンのシティであり、日本海海戦を勝利に導いた東郷平八郎提督をはじめとして、日本海軍はイギリスを範とした。

ユーラシア大陸の両端に産業革命を興したのはイギリスと日本であるとされる。ところが、両国の成り立ちは大きく異なる。日本が奈良時代に帰化人を多く受け入れて以来、大陸との交流が西国大名による貿易に限定された傾向があるのに対して、イギリスはヨーロッパ大陸との民族交流の中で形成されてきた。日本海が基本的に大陸と日本を遮断する機能を果たしたのに対し、ドーバー海峡は大陸とブリテン島をつなぐ海のハイウェイとして機能した。このような地理的歴史的背景をもって、海洋国家イギリスと島国日本が形成される。

海洋国家イギリスは16世紀後半から徐々に頭角を現し、スペイン、オランダ、フランスを抑えて19世紀半ばに世界覇権を確立する。今、大英博物館を訪れば、在りし日々のイギリスの威光が偲ばれる。サッチャー革命を経てもなお入場料は無料であり、世界の人々に国際公共財を提供する懐の深さが伺われる。

ナポレオンをワーテルローに破ったウェリントン曰く、「ワーテルローの戦いはイートンの校庭で勝ちとられたものだ」。ヒトラーの侵攻に対し、スピットファイアに搭乗してメッサーシュミット Bf109 とハインケル He111 の大群に立ち向かい、チャーチルをして「人類史上、かくも多くの人間が、かくも少数の人間によって、かくも多くの恩恵を受けたことは、かつてなかったことだ」と言わしめたジョンブル精神。イギリス興亡のプロセスを振り返りたい。